

【学習プリント】

8 医療サービスとその活用Ⅱ 《生徒用》

2 医療サービスを上手に活用しよう

(1) 医療機関の選び方

※（最初から大きな病院にかかるのではなく）医療施設の役割に応じた利用を

【板書1】 かかりつけ医

○まずは「かかりつけ医」（＝家庭医：普段の健康管理をしてくれる身近な医師）をもとう

・近所にあつて、以前から家族が受診しており、自分の家庭のことや家族の病歴などをよく知っていて、相談にも乗ってくれるような医師。

【メリット】医師が過去の病歴や、家族の体質、家庭の生活習慣などを知っていてくれば、的確な診療やきめ細かい対応が期待できる。

○地域の「かかりつけ医」と「病院」はその役割を分担している。

・病院などへの受診の集中を分散する目的 「3時間待ちの3分間診療」

⇒ かかりつけ医と病院でスムーズに患者の紹介を行う連携システムのことを『病診連携システム』という。

【板書2】 医薬分業

○「かかりつけ医」と同様に「かかりつけ薬局」を持つとよい。「病院」と「薬の取扱」の役割分担

【メリット】専門の薬剤師により、薬の副作用の防止やその人にあつた薬の管理が期待できる。

(2) 医師との接し方

【板書3】 適切な医療サービスを受けるために

【板書4】 こんにちは

① () (説明された上での同意)

⇒ 医師は患者にわかりやすく選択肢を示して説明し、患者が自主的に判断・選択して、受けたいと思う医療を安心して受けられるようにするという考え。医療を受ける側（患者と家族）と、医療を提供する側との人間関係の基本として、広まりつつある。

② () (第二の意見)

⇒ 医療機関での医師の診療を受けている際に、主治医の診断や治療法の選択にかならずしも納得できない場合や確かめたい場合に、主治医以外の医師に意見を求めること。長期にわたる治療や、重大な手術などの場合には、できるだけ複数の医師の診断や意見を聞くことが望ましい。

③ () などの医療情報の開示

⇒ カルテ開示は医療法等、法律的にはまだ義務化されていないが、日本医師会では、患者の求めによるカルテの開示請求には原則的に応じることにしている。

用語説明

■インフォームド・コンセント（説明と同意：教科書P98参照）

（ある医師の意見）

・患者に承諾権を与えると、医者の方の責任が曖昧になって、患者が半分責任を負わなければいけないと勘違いする向きがありますが、そうではありません。医療行為の責任はあくまでも医療者側にあります。決して患者に移るわけではないのです。

・3つの療法があるとしたら、医師はプロフェッションとして、患者毎にどの療法が適しているという順序になるか、選択肢に優劣をつけて横並びでなく縦並びで患者に示し、ひとつずつ患者にイエス・ノーを聞いていくべきです。第一順位を患者が拒否したら第二順位、第二順位を拒否したら第三順位というふうに移っていくべきです。

・医者と患者がお互いに接触しながら、極端に言えばお互いの医療に対する考え方とか病気に対する考え方、生命に対する考え方などの価値観をわかり合うというプロセスがあつてこそ、本当のインフォームド・コンセントになります。プロセスを経ていくと、医者の権利と患者の権利の対抗という面が出てきます。これはお互いに相補って共同で医療をするという関係を作るためのもので、喧嘩とは違います。そういう気持ちを医者の方でももち、患者の方も自覚しなければなりません。

■セカンド・オピニオンって何？（第二の意見：教科書P98参照）

セカンド・オピニオンというのは、直訳すれば「第2の意見」で、「病状や治療法について、自分の担当医以外の医師の意見を聞き、参考にすること」をいいます。

・どういうときにするの？

- ★担当医に、診断や治療方針の説明を受けたが、どうしたらいいか悩んでいるとき
- ★いくつかの治療方針を提示されているが、迷っているとき
- ★他に治療法はないかと考えているとき

→このような場合に、自身で納得して治療を選択し受けるために、他の医師の意見も聞いてみるという方法です

・どうすればいいの？

必要な書類や予約の有無は、病院によって異なりますが、基本的には紹介状や資料が必要となることが多くあります。これは、患者の病気の状況（今までの治療や現在の病状）によって、治療も異なることが考えられ、患者にとって意味のある意見をお話させていただくために、その患者さんの客観的な医学的情報が必要となるからです。

・セカンド・オピニオンを受ける効果って何？

- ★現在の担当医の診断や方針に対する確認ができます
- ★診断や治療の妥当性（適切性）を再確認することで、納得して治療を受けることができます
- ★担当医の提示する治療法以外の治療法を得ることもあります

（3）医療機関や医療サービスの関わり方について考える

【説明】○医療現場の裏側事情を知ろう（別紙プリント）

【作業】

・こうした問題もふまえて、次のことについて話しあってみる。

（1）社会人になった時、医療機関とのよりよい関わり方とはどのようなことだろうか？

（2）医療サービスを受ける側としても、気をつけなければならないこととは何だろうか？

《手順》

- ①附箋に自分の意見を書く（1人2枚まで）→ 中央に貼る 5分
- ②それをグループで見つて、意見交換する 5分
- ③グループで意見をまとめ、発表する（班長） 5分

医療現場の問題

- 病院は多忙にもかかわらず、経営は赤字で採算がとれないところも多い → **病院閉鎖の問題**
- 保険診療による医療報酬が大変低い(米国の1/5~1/10)。手術をすると材料代などで赤字になることも少なくない。
小児科、産婦人科、救急医療、外科などは診療すればするほど赤字になってしまう**不採算部門**。
- 最近の統計では、1年に約4,600人の医師が病院をやめて開業している。3Kといわれる過酷な診療科では病院勤務に嫌気がさしている。
→ **病院医療の崩壊の問題(開業医との不バランス)**
- 医療費の踏み倒し、マスコミの揶揄

たらい回しになる理由の1つに...

救急搬送受け入れ可能な流れ

救命救急センター併設型救急告知病院で実施されている救急体制とは、比較的軽症である1次、2次救急(Walk-in患者)と重症の救急搬送症例である3次救急に分けて対応する運用形態を実施している。

- 重症の救急搬送の患者に対応するためには、内科、外科、脳卒中、循環器科、小児科、産婦人科の各科当医が24時間体制で待機。加えて検査科、放射線科、薬剤科のメディカル部門と協力し、初療処置を行う「救急外来」では人工呼吸器の他、各種生体監視モニター(血圧や脈拍等を監視する装置)を設備し、ICU(集中治療室)で治療等。小康状態になると入院治療を行う「救急病棟」に入院。
- 救急病棟は、急性期の患者の治療を専門に行うためには必要な病棟で、重症の患者を収容するベッドが必要である。
- また、若手医師は1次、2次救急の対応が主で、3次救急に関与するチャンスが少なく、対応できる医師が限られてくるという問題もあり、救急車で搬送される患者数も年々増加を続けているため救急の受け入れは限られる。

「病院」の抱える問題

- **日本人は医者に頼りすぎ？(特に老人)**
・国民1人あたりの年間受診回数
日本:21回 米:5.3回 仏:5.2回 英:4.8回 スウェーデン:2.7回
 - **勤務医や看護師の現状**
現場マスコミは医療現場を攻撃。でも...
・週平均70時間超の勤務。当直で徹夜をしても、交代要員もないところも多い。
・看護師も1人で深夜夜勤をして、翌朝には二人の患者を時間通りに手術室に運ばなければならぬ勤務体制。ヒラリー・クリントン「日本の医師は聖職者のごとき献身」
・病床100床当たりの医師・看護師の数
医師:米71.8 英国40.7 独37.8 仏35.2 日本12.5
看護師:米221 英国120 独100 仏70 日本43.5
- 「3時間待ちの3分間治療」と揶揄されるが、看護師の数をみても米国の1/5という現状ではこれが限界なのである

救急現場の苦悩 “これでいいのか”

- 救急車がタクシー代わり
酔っぱらい
- 何でもかんでも「救急車」
不眠だから
- 「手当」がわからない保護者
軽い発熱 過保護
- いたずら電話

それでも出勤しなければならないのが救急現場

医療サービスのよりよい携わり方を考えてみよう

- こうした問題もふまえて、
- 医療機関とのよりよい携わり方とはどのようなことだろうか？
 - 医療サービスを受ける側としても、気をつけなければならないこととは何があるだろうか？

【作業手順】

- 1 附箋に個人の意見を書く(1人2枚まで) → 貼る 5分
- 2 グループで見て、意見交換する 5分
- 3 グループで意見をまとめ、提出プリントに書く 5分

まとめ:医療サービスを上手に利用しよう

- かかりつけ医やかかりつけ薬局を持つ。
- 病気や怪我について知識を増やし、家庭で可能な応急手当や対処は家庭でおこなう。
- 何でもかんでも「すぐに救急車」は一考するべき。
- 診療の際は、教科書P73表1のように知りたいことをまとめておく。
- インフォームドコンセント等とおして、医師との信頼関係の上で、治療をすすめる。
- **医療機関ばかりに“頼る”姿勢を正す。無知識のままだから問題も起こる。 → 積極的に学習しよう**

2年 保健 提出用ノート 2年 組 番、氏名

第 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10 時限目提出用 (○印をつける)

【ノート・メモ】

【理解できたこと・授業を受けて考えたこと等】